2. 事業の目的と概要	
(1) 上位目標	聴覚障がい児童及び危険地帯に住む健常児童の双方が社会的な偏見、空爆や戦闘による心の傷から自らを守り、PTSD（心的外傷後ストレス障がい）の予防が可能になること。
(2) 事業の必要性(背景)	<p>① パレスチナの障害児</p> <p>ガザ地区南部は国境線の違法トンネルの存在から常に空爆の対象となっており、住居の破壊、住民の被弾による死傷が続いている。加えてイスラエルによる封鎖のため移動に制限があり、近親婚が多く、障がい児が生まれる率が高いといわれている。特に聴力障がいが多く、パレスチナ全体では8.6%と報告されている。日本では、先天性の聴力障害者の出現頻度は5.1%（厚生労働省発行「身体障害児・者実態調査」（平成18年））、診断基準を補正した上での諸外国の出現頻度はスウェーデンで7～8%、オランダ・カナダは3%、その他の国では4%前後と調査されており、諸データを比較してもパレスチナでの聴力障がいは多い。</p> <p>② ラファ市の障害児教育</p> <p>障がい児童は情報不足や、コミュニケーション能力の低さから心にかかる負担が重くなる傾向がある。しかし、ラファには聴力障がい児童に合わせた教育を行う公立学校がなく、当団体のカウンターパートであるエル・アマル社会復帰協会(Elamar Rehabilitation Society～ERS)が、1991年から障がい児童に特別支援教育を提供している。ERSは同時に、国境線の危険地帯(タラスルタン、ブラジル地区)に住む健常児童も対象に、放課後補講を提供し、空爆や戦闘による心の負担をケアする取組を行っている。さらに、障がい児童と健常児童双方の社会性を育てることを目的に、合同クラスも提供している。</p> <p>③ 心理社会的ケア～心のケア～の必要性</p> <p>人は心の重荷になるような出来事を表現することで、PTSD（心的外傷後ストレス障がい）を予防する。ラファ市の児童達に「自己表現の場」は少なく、傷ついた心を癒す機会を逸したまま、PTSDを発症してしまう危険に曝されている。心理社会的ケアとは、そのような自己表現の場を提供し、それを通じて自分の中に眠っていた、あるいは埋めてしまっていた忌まわしい出来事を意識化していくプロセスをたどって、最終的には同じような経験をした人たちと分かち合いの場を作り、個人のエンパワメントを可能にしていく取組である（別添1参照）。</p> <p>当団体は2003～2008年にも、国境地帯に住む児童を対象に心理社会的ケアを実践しており、児童の言動の安定や情動コントロール力の向上に寄与した。その後は年2回の専門家渡航を通し心理社会的ケアを行ってきたが、いずれも短期間での特別プログラムだったこともあり、長期的な視点で心のケアを担えない点、現地職員が心のケア手法を習得するまでには至っていない点が課題として残った。</p> <p>本事業では、年間を通じてケアを行うことで児童へのケアだけでなく、ERS職員へケア手法習得のための人材育成を行う。さらに、障がい児童へもケアを拡大し、危険地帯の健常児童双方へ心理社会的ケアを実践していく。本事業をとおり、児童がストレスや衝動性のコントロールを可能にし、さらにケアを実践できる人材を育成することで、長期的にその地域の安定に寄与するものであると考える。</p>

(3) 事業内容

10歳から15歳までの国境危険地帯に住んでいる健常児童と、ラファ地域全体に住んでいる聴力障がい児童に対し、課外授業の枠で心理社会的ケアを実施し、同じケア手法の同地域における技術移転を図るものである。

1年のケア計画で年間120名の児童のケアを行い、3年間で総合計360名の児童のケアを行う。と同時に、毎年ERSの教師5名ずつに心理社会的ケアのトレーニングを行い、3年間で総計15名の教師を育てる計画である。

「1年次」

1. 児童への心理社会的ケアの実践

1-1. 心理社会的ケアクラスの運営

毎日開かれる放課後の1時間授業は、各クラス約20名で構成され、障がい児童4クラス（男子2クラス(A, B)、女子2クラス(C, D)）、健常児童2クラス（男子1クラス(E)、女子1クラス(F)）に分ける。クラスは以下の表のように行い、描画・写真言語→粘土細工・針金細工→音楽ワークショップ→演劇ワークショップという流れで進んで行く。

	土	日	月	火	水
16時～	A	B	E	A&E*	C&F*
17時～	C	D	F		
			翌週→	B&E*	D&F*

*「合同クラス」

1-2. 夏期修学旅行の実施（6～7月）

男女クラスに分かれ、A～Fクラスまで各1回ずつ、合計6回を実施する。全てのクラスが2泊3日の合宿を計画している。内容は、描画、粘土細工、音楽ワークショップを行う一方で、宿泊を伴い集中した時間と空間の中で少人数グループセッションを行い、より一層のコミュニケーション能力の増進、自己の内面の洞察、そして心的外傷の理解とPTSDからの予防の能力向上を目指す。

1-3. 学校や家族との情報交換・児童に対する心のケア

ファシリテーターは、ケアクラスの運営時間外を使って児童の生活環境や学校環境の情報収集や関係者と情報交換をし、児童の心のケアに役立てる。具体的には、健常児童が通学する地域の学校（全員UNRWA運営の学校）、聴力障がい児が通うERSの学校が対象となり、必要に応じて通常授業にも関わる。また、児童の家庭訪問も企画し、家族との交流も計画している。

2. 人材育成

2-1. ファシリテーター養成講座

ファシリテーター養成は日常的に児童と接するERSスタッフ5名である。年間を通じたケアクラスのサポートと平行して、7日間の特別講座として理論の学習とワークショップを計画している。1・2回目は基礎講座を各2日間行い、基礎的な心理学と社会行動学を

	<p>学び、3～5回目は応用講座としてワークショップを各1日間開催する。対象はERSのスタッフ5名である。</p> <p>2-2. 海外研修</p> <p>ファシリテーター養成講座を受けた研修生からリーダー候補を1名選定し、日本に招聘する。この研修は、2011年3月11日に発生した東日本大震災での心理社会的ケアの知見と実際を共有してもらうことにある。東日本大震災において、心理社会的ケアは宮城県を中心にして体系的に展開され、多くの知見を得るに至っている。また、現在も進行中の心理社会的ケアの現場（宮城県沿岸の被災地を中心）を実際に訪れて、ケアを受けている児童たちとの交流も計画している。自然災害による心的外傷も、紛争や障がい者差別による心的外傷も、そのケアの手法において違いはなく、有益だと考える。</p> <p>「2年次」</p> <p>1. 児童への心理社会的ケアの実践 対象を変え、1年次と同様の活動内容。</p> <p>2. 人材育成 研修を受けていないERSのスタッフ5名を対象とするが、1年次に受講した5人も加わり再度学習する。</p> <p>3. 「心理社会的ケア」シンポジウムの開催 2年次から「心理社会的ケア」がガザ地区において、さらに広く認知され、最新の知見を多くの専門家が共有できるようにシンポジウムを開催する。内容としては、これまでの同ケアの歴史、パレスチナにおける展開、現状の実施状況報告、将来への展望について議論し合い、100人を目安に1回開催する。</p> <p>「3年次」</p> <p>1. 児童への心理社会的ケア 対象を変え、1～2年次と同様の活動内容。</p> <p>2. 人材育成 研修を受けていないERSのスタッフ5名を対象とするが、1～2年次に受講した10人も加わり再度学習する。</p> <p>3. 「心理社会的ケア」シンポジウムの開催 2年次から開催しているシンポジウム「心理社会的ケアとその実践」がガザ地区においてさらに広く認知され、最新の知見を多くの専門家が共有できるように3年次も開催する。100人を目安に3年次の終わりに1回開催する</p>
(4) 持続発展性	<p>この事業はERSが運営している学校のカリキュラムの中で行うものである。「心理社会的ケア」の知識を技術移転し、知識を得た職員がERS内でこのケアを実践し、定着させることを目的としている。従って事業終了後はERSの中に成立した「心理社会的ケア」チーム</p>

	<p>が、ERS のスタッフとして活動を継続させていくものである。</p> <p>3 年間で人材育成を行い、事業終了後は ERS との間で締結した協力協定・覚書に基づき、本件事業を ERS が引き継いでいく。</p>
<p>(5) 期待される成果と成果を測る指標</p>	<p><u>本事業により期待される総合的な成果：</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 児童のコミュニケーション能力が向上し、グループワークに積極的に参加できるようになること。 2. 児童が、自身の内的洞察ができ、自己の存在や人生観に積極的な意味合いが見いだせるようになること。 3. 空爆・戦闘によりもたらされる心的外傷について予防力が増すことで、PTSD から心を守れる力が身につくこと。 4. 心理者社会的ケア技術を身につけた専門家が養成され、子ども達への関わりが改善されていくこと。 <p><u>直接受益者：475 人</u></p> <p>ケアクラス・修学旅行 120 人/年×3 年=360 人 ファシリテーター養成講座 5 人/年×3 年=15 人 シンポジウムへの参加者 50 人/年×2 年=100 人</p> <p><u>間接受益者：約 23,000 人</u></p> <p>ケアクラス・修学旅行 120 人×5 人（家族平均人数）×3 年=1800 人 ファシリテーター養成講座 5 人×60 人（本事業外の担当生徒数）×3 年=900 人 他クラスで心理社会的ケアを実践することで得られると想定。 シンポジウムへの参加者 このシンポジウムを新聞・ラジオ等で報道してもらうことで約 2 万人の間接被益者が得られると想定。</p> <p><u>期待される成果と成果を図る指標</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 児童への心理社会的ケアの実践 <p>期待される成果は、より一層のコミュニケーション能力の増大、グループワークに積極的に参加できるようになること、内的な洞察ができ自己の存在や人生観に積極的な意味合いが見いだせること、そしてたびたび繰り返される空爆や戦闘によってもたらされる心的外傷が PTSD になることを予防するためのスキルの獲得である。</p> <p>指標としては、以下を用いる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1-1 心理社会的ケアクラス <p>GHQ（一般健康質問紙）を用い、クラスに参加することで心の中の「健康度」がどの程度変化したのかを評価する。事業開始時（Pre-test）、半年目（Mid-term-test）、終了時（1 年後：Post-test）に行い、数値による比較検討を行う。GHQ は世界で汎用されている質問紙であり、アラビア語版もあるため選択した。数値目標として、GHQ の数値改善が 7 割以上の児童に認められることを目標とする。</p> 1-2 夏期修学旅行 <p>投影法の心理テスト「バウムテスト」を合宿の前後で行い、その変化を比較する。これは「一本の実のなる樹を描いてください」という単純な指示の描画であり、そこから精神的なエネルギー、安定</p>

	<p>度、将来への希望や願いの度合いといったものを読み取る。数値目標としてはバウムテストにおける「占有率」と「実の数」の改善が7割以上の児童に認められることを目標とする。</p> <p>2. 人材育成</p> <p>2-1 ファシリテーター養成</p> <p>毎年5名ずつ、研修生がより高い心理社会的ケア技術を身につけ、子どもたちへの関わりが一層改善されていくことが成果である。その習熟度を測る指標として、養成講座終了時に筆記試験を行い、得点が8割以上の受講生に「修了書」を発行する。全員合格を目指す。</p> <p>2-2 海外研修</p> <p>海外研修が終了した時点で、当団体に協力する専門家によって作られた質問紙に回答してもらい、8割以上の正当を求める。8割以下の場合は再度追加の講習を行い、日本における講習の要点の理解を深める。同時にレポートの提出を求め、内容の習熟度を評価する。</p> <p>3. 「心理社会的ケア」シンポジウム（2年次3年次のみ）</p> <p>最低で50人、可能な限り100人を目指して参加者を集める。地元メディアの報道が行われることを目標とする。</p>
--	---